

# ディケンズ・フェロウシップ日本支部

The Dickens Fellowship of Japan

平成28年度秋季総会 プログラム

Annual General Meeting 2016 — Programme

日時：2016年10月8日（土） Date: 8 October 2016

会場：中央大学 駿河台記念館（東京都千代田区駿河台 3-11-5）

Venue: Chuo University Surugadai Memoriam Hall, 3-11-5 Kandasurugadai, Chiyoda-ku, Tokyo

理事会 Board of Trustees Meeting (13:30 – 13:55)

駿河台記念館 2階 220号室

総会 Annual General Meeting (14:00 – 14:25)

駿河台記念館 6階 670号室

(Room 670, 6th Floor, Surugadai Memoriam Hall)

第1部 講演 Lecture (14:30 – 15:30)

司会： 田村真奈美（日本大学） Manami TAMURA (Nihon University)

講師： 新野 緑（神戸市外国語大学） Midori NIINO (Kobe City University of Foreign Studies)

「ロンドンの胃袋——ディケンズと市場」

The Belly of London: Dickens and Markets

第2部 シンポジウム Symposium (15:45 – 17:45)

「ディケンズと18世紀」

Dickens and the Eighteenth Century

司会・講師： 原 英一（東京女子大学） Eiichi HARA (Tokyo Women's Christian University)

講師： 榎本 洋（愛知県立大学） Hiroshi ENOMOTO (Aichi Prefectural University)

講師： 吉田尚子（城西大学） Naoko YOSHIDA (Josai University)

講師： 原田範行（東京女子大学） Noriyuki HARADA (Tokyo Women's Christian University)

懇親会 (18:00 – 20:00) Convivial Party

会場： 駿河台記念館 1階 レストラン「プリオール」

会費： 一般・学生 5,500円

## 講演 Lecture

ロンドンの胃袋——ディケンズと市場

神戸市外国語大学教授 新野 緑

海運と商業によって目覚ましい発展を遂げてきたロンドンには、イギリスの国内外から集まる多様な商品が売買される「市場の町」である。なかでも、ディケンズを強く惹きつけたのは野菜や果物、肉類などの食品市場で、たとえば、ウォレンの靴墨工場から与えられた半時間のお茶の時間、コーヒーやバターつきパンを買うお金のない時にはいつも、コヴェント・ガーデン市場を訪れ、パイナップルを眺めて過ごしたと、その自伝に言う。この幼少時の経験は、言葉遣いもほぼそのまま、彼の自伝的な小説『デイヴィッド・コパフィールド』で、主人公の幼少時の体験の中に繰り返され、食品市場が、作家のロンドン体験に占める重要性を明らかにする。コヴェント・ガーデン市場とスミスフィールド市場を中心に、ディケンズ作品に描かれる市場の描写の特徴とその変遷を辿り、食品市場がディケンズの文学的想像力にどのような意味を持つかを探る。

## シンポジウム Symposium

ディケンズと 18 世紀

このシンポジウムでは、ディケンズあるいはヴィクトリア朝小説と 18 世紀文学との関係を、さまざまな側面から検討する。大きく分ければ、18 世紀文学から見たディケンズあるいはヴィクトリア朝小説とディケンズあるいはヴィクトリア朝小説から見た 18 世紀文学ということになるだろう。あまり枠にとらわれることなく、自由に、この二世紀の文学の有機的な関連の諸相を追求してみたい。

司会・講師：東京女子大学教授 原 英一

「18 世紀演劇と「演劇的」ディケンズ」

小説が誕生した 18 世紀は、依然として演劇が主要なジャンルであった。今日まで名を残す作家や作品こそ極端に少なくなったが、演劇の創作と上演は盛んであった。新しいジャンルである小説もまた、演劇のこのような支配体制の影響を免れていない。ここでは、ディケンズがおそらく読んでいなかったと思われるサミュエル・リチャードソンの小説、とくに『クラリッサ』の「演劇性」を見ることによって、「演劇的ディケンズ」の淵源を明らかにする。18 世紀の演劇でもう一つ注目すべきは、犯罪者の跳梁する地下世界が表に出てきたことである。ジョージ・ファーカーの『色男恋の手管』やジョン・ゲイの『乞食のオペラ』に顕著に表れる社会的、文化的変動がディケンズの世界につながることもあらためて確認してみたい。

講師：愛知県立大学准教授 榎本 洋

「サー・チェスターとサー・チェスターフィールド

—ディケンズは 18 世紀をどのように「読み」、「書いた」か—

1780 年代のゴードン騒乱を扱った『バーナービー・ラッジ』には二人の主だった「歴史上の人物」が登場する。一方は、反乱の首謀者であるゴードンであり、他方は『息子への書簡集』（以下『書簡集』）で著名なサー・チェスターフィールドである。もちろん、後者は言及の対象のみのため「登場人物」として扱うには違和感があるだろう。しかし、ディケンズがサー・チェスターという貴族を通して、その批判を展開していることを考えればその隠然たる存在感は無視できないように思われる。

サー・チェスターフィールドの『書簡集』は庶子のフィリップ・スタナップと遠戚の後継者との間にかわされた 600 通にも及ぶ書簡集である（本発表で参照したのはオックスフォード・ワールズ・クラシック版に収録された一部である）。この書簡集はゴードン騒乱が勃発する 1780 年代の前の 1774 年に発表されている。そう見ると『書簡集』の言及には歴史性、意味があるように思われる。それを来る騒乱の底流と考えることで、ディケンズがサー・チェスターフィールドの『書簡集』をもとに、18 世紀イングランドの社会をどう読み、描いたのかを考えていきたい。

講師：城西大学教授 吉田尚子

「サッカーが描いた 18 世紀のイギリス社会—『ヘンリー・エズモンド』を中心として—」

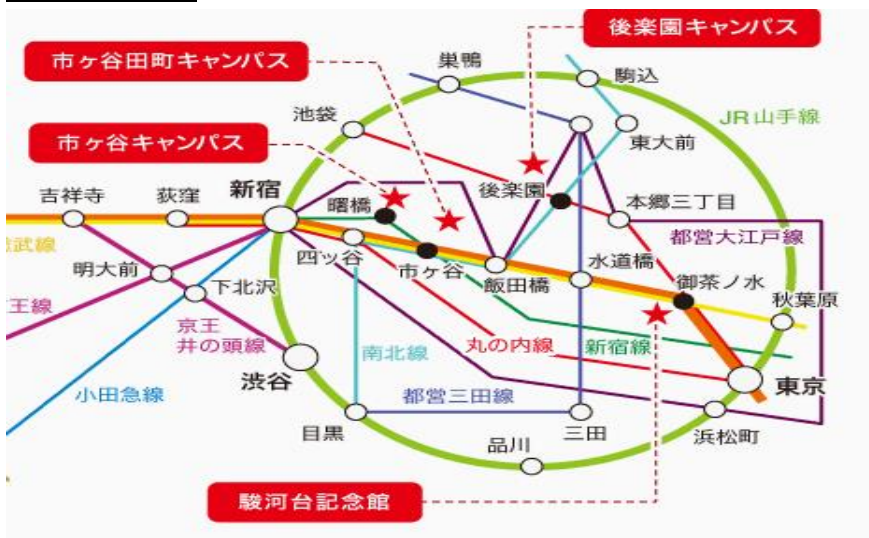
18 世紀のイギリス社会を背景に描いたサッカーの『ヘンリー・エズモンド』を主に取り上げる。そこでは、アン女王の時代に生きたイギリスの上層階級の間人と風俗が描かれている。天涯孤独の私生児と思われていた主人公のエズモンドが成長していく過程で、当時の戦争やジャコバイトの反乱などの政争に彼は巻き込まれていく。歴史上の実在の人物とフィクション上の人物が交錯しながら物語が展開されるが、「歴史を英雄的でなく、日常的なものにしたい」と冒頭で述べられているこの作品で、18 世紀の社会がどのように描かれているのか、社会と個人の関わり合いという問題も絡めて論じたい。

講師：東京女子大学教授 原田範行

「子どもの誕生とフィクションの変容—ディケンズにみる 18 世紀作家の方法的懐疑のゆくえ」

心理描写であれプロットであれ、あるいは、書き言葉としての英語表現についてであれ、18 世紀作家は常に懐疑的で、その懐疑心を作品に持ち込んで憚るところがない。このような 18 世紀作家の方法的懐疑を、現代の読者は、脱線とも逸脱とも退屈とも称しているわけだが、この脱線、逸脱、退屈は、時に作品創造の魅力的な局面を鮮やかに照射する。だが、方法的懐疑に満ちた 18 世紀作家にあって決定的に欠けているのが、ディケンズ作品の重要な要素でもある子どもの描写である。オリヴァー、フローレンス、デイヴィッド、ルーシー、ピップなどに注目しつつ、18 世紀作家の方法的懐疑とディケンズの描く子どもを具体的な描写に基づいて比較検討するのが本発表の目的である。

## アクセスマップ



### 【東京駅からのアクセス】

- ・JR 中央・総武線 御茶ノ水駅下車、徒歩約 3 分
- ・東京メトロ丸ノ内線 御茶ノ水駅下車、徒歩約 6 分
- ・東京メトロ千代田線 新御茶ノ水駅下車 (B1 出口)、徒歩約 3 分
- ・都営地下鉄新宿線 小川町駅下車 (B5 出口)、徒歩約 5 分

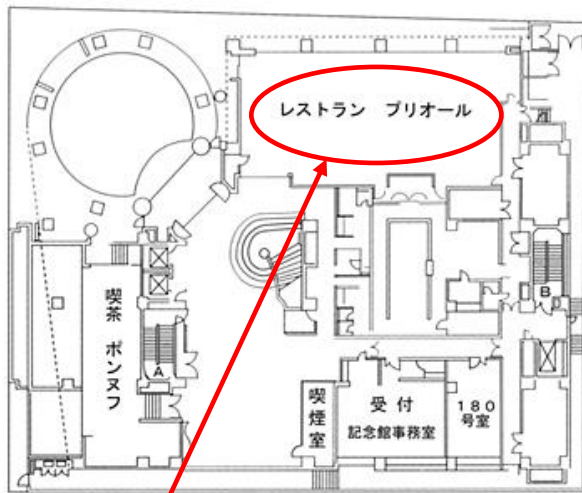
### 【住所】〒101-8324

東京都千代田区神田駿河台 3-11-5

TEL: 03-3292-3111 (記念館事務局)

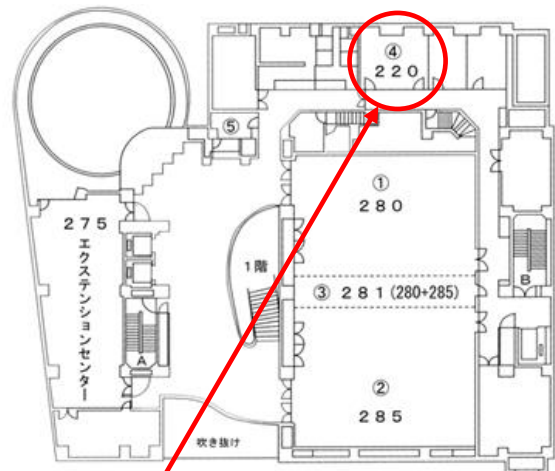
# 館内マップ

## 【1階】



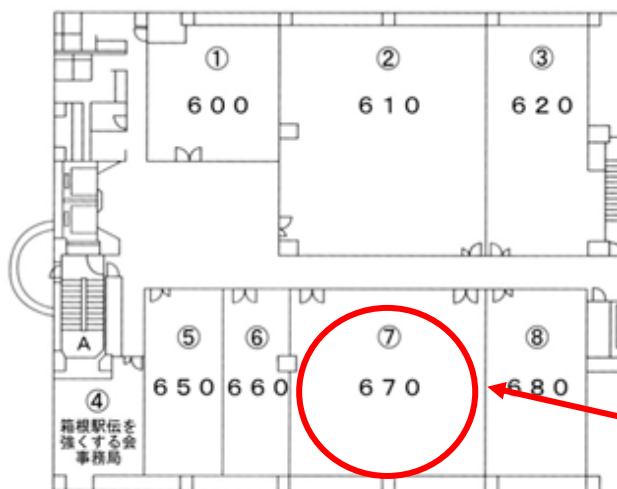
懇親会場 (18:00-20:00)

## 【2階】



理事会・書籍展示 (理事会終了後)

## 【6階】



大会会場